

2009年7月5日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 4章 12～22節

説教題：神の栄光はどこにあるのか

1 イスラエルを全く捨てられた

今朝の箇所もつらいことが語られていて、気が重くなります。本当に神がおられるというのなら、どうしてこんなことが起きるのか。神の助けはどこにあるのかととまどいます。

あるとき、イスラエルはペリシテ人と戦うという状況に置かれました。第一回目の戦いはイスラエルの敗北で終わりました。リーダーたちは、どうすればこの苦しい状況をひっくり返して大勝利に持ち込めるのかと考えます。「そうだ、あの神の契約の箱をシロから自分たちの陣地に担いでこよう。そうしたらきっと、神は私たちを救ってくれるに違いない。」早速、人をやって、契約の箱をもってきました。そのようにして二回目の戦いが始まりました。

ところが、期待はことごとく裏切られ、イスラエルは完全に打ち負かされました。疫病も起こり、三万人が倒れました。エリのふたりの息子、ホフニとピネハスは死ぬ。そして神の契約の箱は敵の手に奪われてしまいました。

悪いときには、悪いことが重なると言いますが、敗戦の知らせを聞いたエリは驚きのあまり、倒れて死んでしまいます。また、エリの嫁も出産間近でありましたが、やはり悪い知らせを聞いて、出産直後に死んでしまいます。エリの家族は一日にして、何人も死んでいくのです。

2 神を試みたイスラエル（詩篇 78：56、57、59）

詩篇 78 編 59 節にこのときのことの説明があります。「神は聞いて、激しく怒り、イスラエルを全く捨てられた。」

神が怒ったその原因については、詩篇 78 篇 56、57 節にあります。「彼らはいと高き神を試み、神に逆らって、神のさとしを守らず、もとに戻って、彼らの先祖たちのように裏切りをし、たるんだ弓の矢のようにそれてしまった。」

彼らは神を試みたとあります。おそらく長老たちがしたことを指しているのだと思います。

神を試みることについて、有名なエピソードが新約に書かれています。イエスが荒野で四十日間断食をされたとき、悪魔の誘惑を受けます。その誘惑の三番目で、悪魔は神殿の頂にイエスを立たせてこう言います。「あなたが神の子なら、ここから飛び降りなさい。神はあなたを守ってくださると聖書に書いてありますよ。」それに対し、主は言われました。「あなたの神である主を試みてはならない。聖書にそう書いてある。」このようにしてイエスは神を試みるという誘惑を退けられました。

一方、長老たちは神は自分たちを守ってくれるに違いないと思い込み、契約の箱を担いでくる。それは神を試みるという行いでした。神を裏切る行為でした。

責任を問われるのは長老たちばかりではありません。契約の箱を管理していたのは祭司です。長老たちのしようとしていることを、真っ先に止めなければならなかったのは祭司です。ところが、祭司であったホフニとピネハス。長老たちを止めるどころから、契約の箱の先頭に立ち、このことを積極的に推し進めていったのです。こうやってイスラエルは罪を犯していきました。神がイスラエルに対して怒りを燃やしたのは、このような事情によります。

それでも、私たちは思います。「神は何と厳しいお方なのだろう。慈悲というものがないのか。」本当に神は厳しいお方なのかどうか、それはまた後で触れて参ります。

3 さばきの嵐の中の救い

(1) さばき？

エリは戦場からもたされた悲しい知らせを聞き、その直後、仰向けに倒れてそのまま息絶えました。エリはいったい何を聞いて驚き、倒れたのでしょうか。

エリが死んだという知らせは、エリの嫁であるピネハスの妻のところにも届きました。そのショックからか嫁は陣痛が起り、男の子を出産します。その直後、嫁の容態が急変し、死んでいきます。エリの嫁は、いったい何を聞いて驚き、死んでいったのでしょうか。

エリは、いろいろ問題のあった息子たちでしたが、それでも愛するふたりの息子の死を聞いて驚き死んだのでしょうか。エリの嫁は、夫の死の知らせを聞いて、そのショックから死んだのでしょうか。よく聖書を読んでください。

13節。「彼が着いたとき、エリは道のそばの設けた席に座って、見張っていた。神の箱

のことを気づかっていたからである。」そして18節。「彼が神の箱のことを告げたとき、(中略)死んだ。」もちろんエリは父親として息子の死を悲しんだでしょう。しかし、エリの心にあつたのは常に神の箱のことだったと聖書は注意深く記しています。あの大事に思っていた神の契約の箱が敵の手に奪われた。その知らせを聞いてエリは卒倒していきました。

では、エリの嫁はどうか。もちろん、夫が死んだこと、しゅうとが死んだことは嫁として悲しい知らせでした。しかし、神の箱が奪われたというが、それにもまさる大きなショックを与えたということが何度も繰り返されている。エリの嫁は言いました。「栄光はイスラエルを去りました。神の箱が奪われたから。」子供の名はイ・カボテ。それは「栄光はどこに」という意味だと聖書の欄外に記されています。神の栄光が自分たちのところから去ってしまった事を嘆き悲しんでいるのです。

エリの家はまるでろわれたように、次から次へと不幸が重なっていきます。発端は、ふたりの息子たちの罪から始まったことでした。エリがこのふたりの息子たちを十分に指導できなかった。その弱さのせいでもありました。確かに神のさばきは、エリの家にくだされてはいます。

(2) 救われていくふたり

「しかし」と、私は考えます。神のさばきにしては、どうしてエリが神の箱のことを気にしていたとわざわざを詳しく書くのか。あるいは、エリの嫁が神の栄光が去ったことを残念に思ったことをなぜここまで詳しく書くのでしょうか。さばきが下りましたというこ

となら、こんなことを書く必要はありません。

エリが3章18節で告白したことばを思い出していただきたい。「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように。」エリは自分の弱さを認め、自分の罪を認め、自分は裁かれるべき人間だと受け入れました。エリが神の前に砕かれたことを表しています。砕かれた心を神は決して粗末に扱う方ではない。それが聖書の約束です。どんなことがあったとしても、神は悔いた者を救うお方です。

そうしますと、この箇所はどうなるのか。不幸が続いているようにしか見えない。けれどもよく見ると、実は神はこのさばきの嵐の中で、エリとエリの嫁のふたりを救おうとされている。そのことをはっきりと示しているのです。

4 イエス・キリストの死とよみがえり

(1) 死に方と救いの関係

椅子から転げ落ちて首を折って死んでしまうエリ。難産の末に、出血が止まらなくて死んでいくエリの嫁。こんな死に方をしていても、救われるということなのか。皆さんは疑問に思うかもしれません。

私たちどこかで考えています。安らかに長寿を全うした人は幸せな人。でも、悲惨な事故や病気で若くして死んだ人は不幸な人。

確かに聖書では長寿を全うすることは幸いなことだと書いている箇所があります。しかし一方、不幸な死に方をしたので、その人は救われたいとは書いていません。どんな死に方をするのかと、救いとは直接には関係がない。

イエス・キリストが十字架におつきになり、死なれたときのことを思い出してください。

イエスは三十代の半ばという若さで、病気でもない事故でもない、無実の罪を背負わされ、死刑という手段によって殺された。これ以上のない悲惨な死に方です。この世の考え方で言うなら、イエスは絶対に救われたいということになってしまいます。でも、それは変ですよね。

どのような死に方をするのかと、その人の救いは直接には関係がない。改めて確認したいと思います。

(2) 悲しむ者たち

イエスが死んだ後、アリマタヤのヨセフが、イエスの体の下げ渡しを願い出ました。ヨセフは自分が持っていた墓にイエスのみからだを葬ることにしました。その一部始終を墓の近くに座って見ていた女性たちがいました。マグダラのマリヤと他のマリヤであったと聖書にあります。

このマリヤは、イエスの母だろうと言われていています。マリヤは、天使ガブリエルから告げられた言葉を片時も忘れることはなかったはず。「その子はすぐれた者となり、いと高き方のこと呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」その国は終わることがない。けれども、今日の前に見えるのは、「終わってしまった」という光景です。栄光が去ったとしか言えない光景です。エリの時代に、神の契約の箱が奪われてしまったのと全く同じ光景です。かつてのエリやエリの嫁が受けたショックを、ヨセフもマリヤたちも経験していきました。

(3) 悲しむ者を慰める神

神の箱が奪われたとき、エリとエリの嫁はそのことを悲しみました。イエスが十字架で死なれ、墓に葬られたとき、ふたりのマリヤはそのことを悲しみました。墓を離れずに、じっと日が暮れるまで見守りました。いずれにしても、世の人たちには全く意味のない行いにしか見えません。ところが聖書によれば、決して無駄なことをしていたのではない。いや、この人たちは、大切な意味のあることをしていたのだと教えています。

イエスは言われました。「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるから。」私は御言葉を暗記するのが苦手ですが、この言葉だけは思い出すことができます。神の栄光はどこに行ったのかと悲しむ者を、神はけっして忘れない。エリとエリの嫁の死に方だけを見れば、私たちの目には悲惨な出来事にしか見えません。しかし、聖書は約束します。エリもエリの嫁も救われて、慰められていくのだということです。

そのことを見事に経験していったのは、ふたりのマリヤでした。金曜日の夕方、ふたりは悲しみに暮れながら墓を見つめていました。やがて日曜日の朝、ふたりのマリヤはよみがえられたイエスと再会します。マリヤたちは最初、何が起きたのかわからず、呆然としていました。そんなふたりにイエスは声をかけます。「おはよう。恐れてはいけません。」

イエスの声を聞いたとき、初めてこの方はよみがえられた神の子キリストなのだとわかりました。ついさっきまで涙を流して悲しんでいたふたりだったのです。神はこのようにしてふたりのマリヤを慰めてくださいました。

(4) 神は苦しみをともにされる

今朝の箇所を読んで、厳しい神、怖い神というイメージで頭がいっぱいになったかもしれません。

神はどのような方なのか、もう一度思い出していただきたい。イスラエルの民がエジプトで苦しんで叫びの声を上げていたとき、神はその声を聞いて、何とかして救い出さなければと考えた神ではないですか。怖じ気づくモーセを無理矢理のように召し出し、エジプトに遣わして救おうとされた神ではなかったですか。

神が本当に厳しいお方だと言うなら、聖書はここで終わるはずですが。ところが、そうではない。神は関わり続けるのです。それも、ご自分もいっしょに苦しみながら関わり続けていく。

イエスが十字架の上でこう叫ばれました。「わが神。わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マタイ 27:46)

「神はイスラエルを全く捨てられた」とありました。決して残酷な神ではありません。父なる神は、ご自分のひとり子を十字架の上でお見捨てにしなければならぬのです。大変な犠牲を神が払っていかれる。そこまでも、神は私たちが愛し、私たちが救いたいと願っているのです。

キリストは、さばきの嵐が吹きすさぶ十字架におかかりになり、私たちの救いのために、ご自分のいのちをお捨てになられました。

聖霊は私たちに語り掛けます。私たちがくじけそうになるとき、さあもう一度前に進んでいきましょう。わたしもいっしょにあなたの苦しみを苦しむから。

どれほどの神の愛が私たちを取り囲んでいるのか、その恵みを覚えたいと思います。